川崎医療福祉学会誌　Vol. 29　No. 1　2019　147－151

短　報

親との関係性および親になることに対する意識が大学生の性に対する態度に及ぼす影響

福　岡　欣　治*1

要　　約

本研究では，大学生における親との関係性および親になることへの準備（親準備性）と性に対する態度との関連を調べた．親との関係性として，過去のソーシャルサポートと，現在の親に対する信頼感を取り上げた．質問紙調査により大学生206名から回答を得て，変数間の関連性を分析した．偏相関分析およびパス解析の結果，親との関係性は親性準備性に影響を与え，結果として性に対する安易な態度を抑制することが示唆された．

１．緒言

若年での予期しない妊娠は，しばしば社会的に問題となる．人工妊娠中絶や，出産後の家族関係や夫婦関係への悪影響[1]が指摘されてきた．

これに関連する事柄として避妊の問題があり，しばしば避妊方法に関する知識が取り上げられる[2]．しかし，知識はもちろん非常に重要であるが，その欠如が避妊をおこなわない直接の原因であるとは限らない．たとえば今野と西脇[3]は大学生のほとんどが避妊方法についての知識があることを，吉田と前田[4]は人工妊娠中絶経験者が「避妊の知識も必要性の認識もあるが，実行しなかった」ことを報告している．

本研究では，若年での予期しない妊娠を防ぐ心理的基盤として，親になることに対する意識の高さ，およびその意識を支えるものとして親との関係性に注目し，性に対する態度との関連を検討する．服部[5,6]は親準備性の概念を「親になる資質」としてだけでなく「親になることをどのように意識しているのか」という観点から捉えており，そこには子育ての自覚と責任や自立した人間への成長などが含まれる．また，親子関係の認知と親準備性の関係が報告されており[7]，親子の関係が良いほど中高生の性行動が抑制されているとの指摘もある[8,9]．従って，服部[5,6]の概念化にもとづく親準備性と親子の関係性は，妊娠につながるような安易な性行動に対する抑制的な態度と関連すると考えられる．

２．方法

２．１　被調査者

X大学の大学生211名[†1]に調査を実施し，極端に回答不備の多かったものを除く206名（男子37名，女子170名；平均19.70歳，SD=0.79）のデータを分析対象とした．

２．２　測定内容

２．２．１　親との関係性

現在の信頼感と過去のソーシャル・サポート受領の2側面から測定した．「親」は原則として両親を指すものとした．現在の信頼感については，酒井[10]の信頼感尺度8項目を用いた．回答は4件法（いいえ～はい）とした．過去のソーシャル・サポート受領については，細田と田嶌[11]より因子構造をふまえ12項目を抜粋し，中学校卒業以前の親との関係について4件法（全くなかった～よくあった）で回答を求めた．

２．２．２　親準備性

服部[5,6]の尺度にもとづき，「親になることの意義」，「子どもの養育」，「親になることへの負担感・不安感」，「親になることへの要件」，「世代の継承」などに該当する計35項目を用いた．回答は4件法とした（ぜんぜん思わない～とても思う）．

２．２．３　性に対する態度

和田らの一連の研究[12-16]で用いられてきた性的態度の測定項目から「寛容さ」および「責任性」を表すとされる項目を抜粋した（注：和田らの一連の

*1 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　臨床心理学科
（連絡先）福岡欣治　〒701-0193　倉敷市松島288　川崎医療福祉大学
E-mail : fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp

研究では論文毎に因子構造が異なるため，複数の研究を比較して共通性の高いものを抽出した）．その上で，項目内容を精査して表現を調整し，また性に対する安易な態度や避妊を中心に責任ある態度を表すと考えられる項目を新たに作成し，最終的に25項目とした．作成された項目は和田らのものと同様ではなく，半数以上が新たに作成されたものとなった．回答は5件法（そう思わない～そう思う）とした．

２．２．４　基本属性

学科，学年，年齢，性別，居住先（自宅または自宅外）について尋ねた．

２．３　実施手続き

学期ガイダンスないし講義終了時に，担当教員の了承を得て受講者に趣旨説明と協力依頼をおこなった．回答は自由意思によることを確認のうえで無記名式の調査票を配布し，その場で，もしくは後日に回収した．

２．４　倫理的配慮

調査への協力が自由意思によること，回答しないことによる不利益は一切ないこと，無記名の調査であること，データは個人別でなく集団の傾向として統計的に処理すること，結果を研究目的以外に使用しないことを事前に説明し，同意が得られた場合に記入・提出するよう求めた．実施にあたり，研究者の所属学科における学科長および研究倫理委員会の承諾を得た．なお，実施主体等は調査票と依頼状の両方に明記されていたが，実施後のクレーム等はなかった．

３．結果

３．１　尺度構成

各尺度について，それぞれ主成分解・プロマックス回転の因子分析をおこなって，尺度構成ならびに得点化について確認した．最終的に抽出された項目のうち主なものは，表1に示すとおりである．また，それぞれの信頼性係数も表1に付記している．

表1　各尺度を構成する項目（抜粋）

親との関係性	現在の信頼感（α＝.91）	あなたは，あなたの親と一緒にいて幸せですか
		あなたは，あなたの親が好きですか
		あなたの親を，あなたは誰よりも信頼できますか
		あなたと一緒にいて，あなたの親は幸せだと思いますか
		あなたの親は，あなたを一番信頼していると思いますか
	サポート受領（α＝.93）	落ち込んでいるときに励ましてくれる
		何か困っているときに，アドバイスをくれる
		気持ちをわかってくれる
		分からないことがあるとき，教えてくれる
		共通の趣味や関心を持っている
親準備性	責任・要件（α＝.91）	子どもを，責任をもって育てることである
		子どもを育てる自覚が必要である
		子育てについて学んでいく姿勢が必要である
		常識をもち，世間を知ることが必要である
		子どもの成長を楽しみ，幸せを感じることである
	意義・価値（α＝.91）	自分の子孫を残すことである
		自分が受けた命をつなぐことである
		自分のことを必要とする人ができるということである
		価値ある立派なことである
		自分自身も成長する機会である
	負担・制約（α＝.86）	時間的制約が生じる
		心身の実質的負担を被る
		子どもの人生を背負うことへの負担感がある
		漠然とした不安を感じる
		自制することが求められる
性に対する態度	性への寛容性・快楽性（α＝.88）	一晩かぎりの性行為でも受け入れられる
		あまり好きでない人とでも性行為を楽しめる
		どんな場合の性行為も相手が同意すればかまわない
		愛情のない性行為は意味がない(逆転項目)
		基本的に，性は商品と同様に取り引き可能である
	性・避妊への責任性（α＝.82）	性行為の責任は双方にある
		性行為を行う責任として避妊をするべきである
		子どもをつくる気がないなら，避妊をしなくてはいけない
		私は，性行為をすることになったとき，避妊について対処できる
		避妊をしない性行為は，妊娠・出産・育児を担うことができる人のすることである

表2　変数間の関連性（偏相関係数）

指標（因子）	①	②	③	④	⑤	⑥
親との関係性						
① 現在の信頼感						
②過去のサポート受領	.70***					
親準備性						
③責任・要件	.24***	.40***				
④意義・価値	.42***	.50***	.58***			
⑤負担・制約	.01	.09	.23***	.24***		
性に対する態度						
⑥性への寛容性・快楽性	-.17*	-.10	-.10*	.01	.11	
⑦性・避妊への責任性	.18*	.19**	.50***	.21**	.11	-.33***

性別と学年を統制した偏相関係数　*p<.05　**p<.01　***p<.001

親準備性については，固有値1以上の因子は6つであり，固有値の推移と3～6因子での回転後の因子構造の両面から，3因子解を採用した．服部[6]にもとづく事前の分類をふまえ，第1因子から順に，①親になることへの「責任・要件」の自覚，②親になることの「意義・価値」の認識，③親になることによる「負担・制約」を感じること，と解釈した（以下「責任・要件」「意義・価値」「負担・制約」と表記する）．

性に対する態度については，固有値1以上の因子は4つであり，その推移および回転後の因子構造から2因子解が適当と判断した．ただし一部に負荷量の低い項目がみられ，最終的に3項目を削除して22項目とした．各因子に負荷量の高い項目内容から，第1因子は「性への寛容性・快楽性」，第2因子は「性・避妊への責任性」を表すものと解釈した．

親との関係性については，信頼感，ソーシャル・サポート受領のいずれも，固有値1以上の因子は1つのみであった．負荷量も十分に高く，それぞれ1因子性のものと解釈した．

３．２　変数間の関連性

３．２．１　偏相関係数による関連性の検討

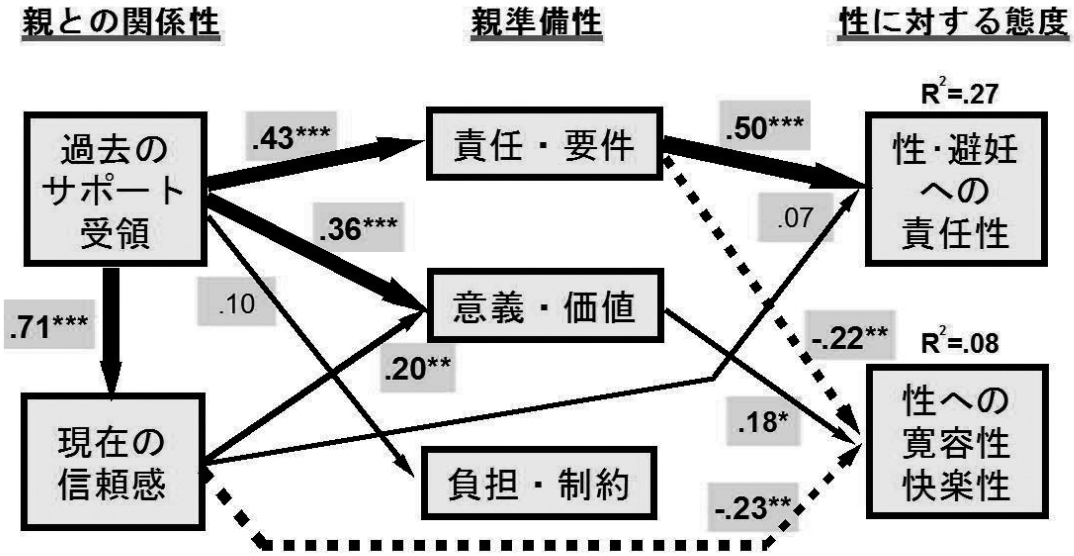
因子構造を確定させた各尺度についてそれぞれ因子得点（因子分析の結果として導かれる，回答者全体において平均0，標準偏差1に標準化された値）を算出した．これらの一部が学年および性別によって若干異なることを確認したうえで，学年と性別を統制した偏相関係数により，相互の関連性を検討した．その結果，表2に示すとおり，親準備性の「責任・要件」と「意義・価値」が性に対する態度の「性・避妊への責任性」と有意な負の関連性を示した．さらに，親との関係性とくに過去のソーシャル・サポート受領は親準備性のこれら2因子と強い正の関連性を示した．

３．２．２　パス解析による仮説的な因果関係の検討

表2に示した変数間の相関関係をふまえて，過去および現在の親との関係性が親準備性に影響を与え，それらが性に対する態度を規定すると仮定したパス解析（誤差項以外の潜在変数を仮定しない形での共分散構造分析；同順位の変数における誤差項の間には相互の相関を仮定）をおこなった．その結果，図1に示すとおり，過去のソーシャル・サポート受領が現在の信頼感の基盤になるとともに，とりわけ親準備性の「責任・要件」の自覚を介して性・避妊への責任性の認知につながっていること，現在の信頼感もまた一定の影響を及ぼしていることを示唆する結果が得られた．

４．考察

本研究の結果は，親から過去にソーシャル・サポートを受けてきた経験の認識が，親になることへの責任や要件の自覚を強く促し，性に対する責任ある態度へとつながっていることを示唆している．また，現在の親との信頼関係もまた，性に対する安易な態度を抑制することに寄与していると考えられる．木原[17,18]は，性感染症や中絶等につながる若年者の不適切な性行動を抑制する要因としての人間的なつながり（コネクティドネス connectedness）の概念モデルを紹介しているが，本研究の結果は基本的にこれと対応している．そして新たに，親になることへの意識の高さが媒介変数になり得ることを指摘する



$\chi^2(7)=12,78(p<.10)$, GFI=0.982, AGFI=0.928, RMSEA=0.065, CFI=0.985
+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

図1 パス解析の結果

（各変数の誤差項ならびに同順位の変数における誤差項間に仮定した相関は記載省略）

ものである．

ただし，本研究は一大学での小規模な横断研究であり，実際の性行動や妊娠の問題を直接に扱っているわけではない．また，対象者の中で男子学生が少なかったことから，男女別の検討をおこなわず，性別を統制変数として扱った．今後はより大規模かつ多様なサンプルを確保し，対象者の性や避妊に関する知識および行動の実態を含めた検討が望まれる．

注

†1）医療福祉系の大学生であるが，回答者はいずれも技術系学科の所属であり，保育・心理・看護・福祉等の分野を専攻する学生は含まれていない．性や生殖，保育等の内容は専門科目に含まれていないことから，一般的な大学生の一サンプルとして本調査を実施した．

謝 辞

本研究の調査は，水川愛さん（川崎医療福祉大学平成27年3月卒業）との共同研究としておこなわれました．調査の実施に際して多方面にわたりご協力くださった先生方，および匿名の回答者の皆様に，改めて深く感謝いたします．

なお，本研究の遂行にあたり，利益相反関係にある企業等はありません．

文 献

1）村越友紀，望月善子，渡辺博，稲葉憲之:10代出産女性の現状と課題―10代出産女性のアンケート調査からの検討―．獨協医科大学産科婦人科学，**38**(1)，87-94，2011.

2）橋本紀子，田代美江子，関口久志編：ハタチまでに知っておきたい性のこと．第2版，大月書店，東京，2017.

3）今野木綿子，西脇美香：大学生における性知識・性モラルと性行動の関係．山形保健医療研究，**9**，33-47，2006.

4）吉田佳代,前田ひとみ:望まない妊娠の予防対策に関する研究―A 県における人工妊娠中絶経験者の面接調査から―.

母性衛生，**54**(4)，604-611，2014.
5）服部律子：大学生の親になることに対する意識．思春期学，**26**(2)，261-267，2008.
6）服部律子：親準備性尺度作成のための因子抽出の試み．思春期学，**26**(4)，428-432，2008.
7）小林真：認知された親子関係は大学生の親性準備性にどのような影響を及ぼすか．人間発達科学部紀要，**8**(2)，43-48，2014.
8）北村邦夫：望まない妊娠，その効果的な防止対策への提言．母子保健情報，**60**，46-52，2009.
9）北村邦夫：10代の望まない妊娠，どうして減った，どうしたら減らせる．思春期学，**28**(1)，57-63，2010.
10）酒井厚：対人的信頼感の発達：児童期から青年期へ―重要な他者間での信頼すること・信頼されること―．川島書店，東京，2005.
11）細田絢，田嶌誠一：中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究．教育心理学研究，57（3），309-323，2009.
12）和田実，西田智男：性に対する態度および性行動の規定因（Ⅰ）―性態度尺度の作成―．東京学芸大学紀要第1部門，**42**，197-211，1991.
13）和田実，西田智男：性に対する態度および性行動の規定因．社会心理学研究，**7**(1)，54-68，1992.
14）和田実：大学生の性に対する態度，性行動と恋愛について．東京学芸大学紀要第1部門，**45**，155-165，1994.
15）和田実：大学生の性に対する態度と性行動の関係に関する縦断的研究．思春期学，**19**(2)，210-218，2001.
16）和田実：性に対する態度および性行動の経年変化とそれらの規定因．思春期学，**22**(4)，481-494，2004.
17）木原雅子：10代の性行動と日本社会―そして WYSH 教育の視点―．ミネルヴァ書房，京都，2006.
18）木原雅子：現代社会と若者の性行動．母子保健情報，**60**，59-62，2009.

（令和元年5月25日受理）

Effects of Relation with Parents and Parenting Readiness on Sexual Attitudes in University Students

Yoshiharu FUKUOKA

（Accepted May. 25，2019）

Key words : relation with parents, parenting readiness, sexual attitudes, parental support in childhood, trust in parents

Abstract

This study investigated the effects of one's relation with one's parents and parenting readiness on the sexual attitudes in university students. Past parental support in childhood and current trust in parents were focused on as relations with parents. 206 students (37 men and 170 women) participated in the questionnaire survey anonymously and voluntarily. They responded to the questions on parenting readiness, sexual attitudes, and relations with parents. Partial correlations and path analysis suggested the inhibiting effects of relation with parents and parenting readiness on easy sexual attitudes.

Correspondence to : Yoshiharu FUKUOKA　Department of Clinical Psychology
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki，701-0193，Japan
E-mail：fukuoka@mw.kawasaki-m.ac.jp
（Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.29，No.1，2019 147－151）